

山形・山形城跡

やまがたじょう

- 1 所在地 山形市霞城町
- 2 調査期間 二〇〇三年(平15) 五月～十一月
- 3 発掘機関 山形市教育委員会
- 4 調査担当者 五十嵐貴久
- 5 遺跡の種類 城郭跡
- 6 遺跡の年代 中世、近世(一六世紀～一九世紀)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(山形)

山形城跡の創建は斯波兼頼によるもので、延文元年(一三五六)にさかのぼる。以後斯波氏は地名をとり最上氏を名乗り、第一代最上義光の頃に最大五七万石の近世大名となるが、後に改易となる。その後譜代大名の交替地となり、水野家(五万石)で明治に至る。調査地点は本丸と二ノ丸をつなぐ大手橋地点である。橋は木橋で、遺構として二本の橋脚柱が現存してい

る。今回紹介する木簡は、大手橋の南側の堀内より出土した木製部材である。最大で長さ約一八〇cm直径約三〇cmの円柱状で、一本の柱を縦に二分割している。外面は一端が丸みを帯びた肩部を持つ閉塞的な状態であるのに対して、一方は中心部が削り抜かれ、接合すると円形の袋状の孔が開く。内面には両材を接合するための丁寧な細工が施され、接合後の部材のゆがみやズレを極力排除する意識が窺われる。主体部を構成する部材及び接合細材はアカマツであり、内部の接合材には一部にウルシ属などを用いている。墨書は片側の主体部の閉塞する端部側に記されており、その端部を下位にして倒立させた状態で正対する。この部材は橋に関連する可能性を持つが、詳細は明らかではない。

8 木簡の釈文・内容

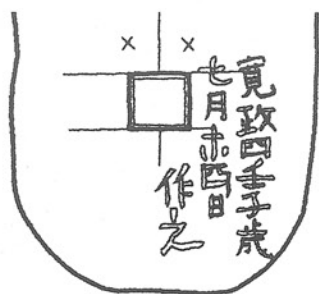
(1) 「寛政四千子歳
七月廿四日
作之」

1800×300×150 065

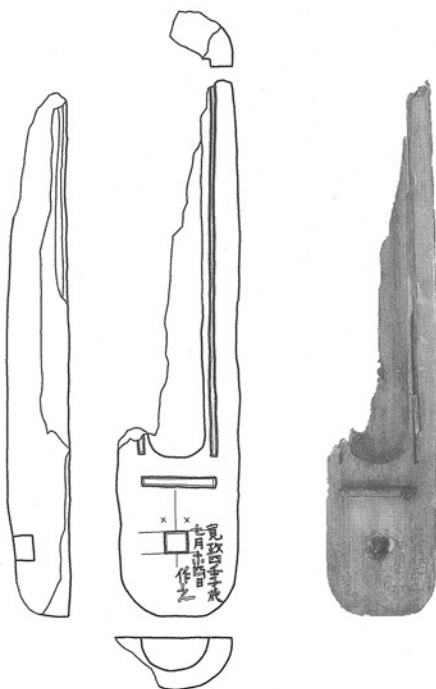
寛政四年(一七九二)は、秋元永朝が城主の頃で、明和四年(一七六七)に川越より入封した秋元氏は、天明・寛政期に山形城を修復する。

なお、本木簡の釈読にあたっては、東北芸術工科大学の村木志伸氏のご教示を得た。

(五十嵐貴久)



(部分)



新たに釈読された陸奥国荷札木簡

『平城宮木簡三』に所収の三〇五八号木簡で、興味深い文字が判読されたので紹介する。某郡の贄荷札で、国郡名は読めていなかった。保存処理・赤外線テレビカメラの活用により、釈読が進んだ。

国名の一文字目はこざと偏の文字で、旁には四本ほどの横画がある。郡名は「石取」か「名取」。『同四』四〇二四号木簡の「陸奥」字などと比較し「陸奥国名取郡」と確認した。また「御贄」の上は「布」と判読され、郷名でなく品名であろう。昆布と推測されるがその種類は不明。新釈文は以下の通り。

「陸奥国名取郡□□布御贄壹籠」

天平元年

〓十一月十五日

319×25×6 031



(馬場 基)